

福島敏夫随筆集「乙戸南雑話【花鳥風月および星・虹を愛でながら】」

主宰論説57

「いのち・寿命・生き方」雑話（新継続版）

『人のいのちは、平均的にどれぐらいで、自分は、どれぐらいにいのちがあるのだう？』、『寿命は、いろいろなものもあるだろうが、はたして予測できるのだろうか？』、『古今東西、先人は、どのように考え、どのような生き方をしたのだろうか？自分はどのような生き方をすればいいのだろうか？』という問いは、難しいけれど、人類始まって以来の永遠のテーマのひとつかもしれない。

「いのち短し恋せよ乙女・・・」というゴンドラの歌の『いのち』のモチーフ、手塚治虫医学博士が、ライフワークとした『火の鳥』の漫画の宇宙生命（コスモ・ゾーン）という概念、人類生き方思想史原論の中の「生き方の金字塔」でも取り扱われている難しいテーマではあるが、概略をまとめておくのも悪くないし、有用かと思われる。

この随筆集の序文で、次のように記述したが、大筋のところは、間違っていないと考えられる：

人を問わず、動・植物を問わず、生きとし生けるものは、この世に生を受けて、幼年期・青年期を通じて、十分に生命の息吹を謳歌し、生命力の高揚する壮年期を経た後は、いろいろな老化・劣化の影響を受けながら、寿命に達し、やがては土または海に帰ることになる。この寿命たるもの、長短の差があっても、いわば、その生物種生来の生命力に基づくもので、如何なるものも逆らえず、静かに死の訪れを待つことになるのは、いわば、自然の哲理である。されども、頂いた命を大事にして、限られた寿命の中で、大波小波に揺れ揺られながらも、花鳥風月や星・虹などの自然の美景を鑑賞し、動・植物の生命の息吹を感じ、一日一日の生活とまわりの人とのつながりを大切にし、夢と希望を考え、いろいろなことに感受性を持ち、天命および天寿を全うすることが、人間本来の生き方ではないだろうかと考えられる。

ただ、いのちあるいは寿命は、必ずしも予測できないし、また、予測したとおりになるとは限らない。想定外の天変地異や不慮の事故により、長いはずの命が短くなる場合もある。

世界史に名を残すような偉人は、「この道一筋の生き方」を全うすることにより、人類への貢献の金字塔を打ち立てたのかもしれない。しかし、普通の人には、必ずしも一つの生き方を全うできず、大波小波に揺り揺られながら、かなりの程度、ジグザグコースを歩まざるを得ない。直線的で、平坦で、彩りもない、白黒人生を送る人は稀である。回り道をした方が、かえって、早く、目的地につくこともある。それでも、寿命というものを考えてみると、寿命というものは、ある程度それぞれの人で固有のものが決まっているのかもしれないと思うこともある。「天才は夭折する」と言われるように、才能ある人が、生命力に恵まれず、惜しまれつつ早死する人もいるし、天寿を全うして、90歳近くまで生きて、すばらしい業績を残す人もいる。人が生き抜くためには、ある程度、情熱と信念がいると言われるが、必ずしもそれだけでなく、心身の健康と環境の面もあるのかもしれない。知力、体力、学力のほかに、生命力というものも、人の生きざまにおける重要な資質と考えられる。また、人間も動・植物を問わず、生きとし生けるものは、生を受けて、十分に生命を謳歌し、生命力が高揚する壮年期を経た後は、いずれは死して土及び海に戻ると言う自然の哲理を免れないように、建築・土木の人工の建造物も、長年経つうちには、いろいろな風化・劣化をし、あるいは、地震、火事、風・水害などの自然災害を受けて倒壊し、元の黙阿弥の状態に戻ると言う宿命を免れない。それでも、劣化のメカニズムをよく理解し、工学的な適当な配慮をすれば、医者

医療行為にも似て、天寿を全うさせることも十分可能であるが、ある程度は、気候・風土とも関連してくる。材料・部材の寿命、人工建造物の寿命、文明の利器や製品の寿命、動・植物の寿命、人間の寿命、地球の寿命、宇宙の寿命など、寿命にもいろいろある。長らく材料・部材およびシステムの耐久性の研究の一環として、寿命予測もやってきたが、寿命予測が如何に難しいかが実感である。それでも、命ある限り、体が動く限り、頭が働く限りは、続けたいと思う次第である。

2026年8月20日書き出し、
2026年8月21日継続版
2026年8月26日進行版
2026年9月11日続々継続版
226年9月14日夜新継続版

。

平成 24 年 6 月 5 日

自由俳句：蜻蛉は命を見つめ今生きる

令和7年12月15日追記

壮年期を過ぎると、やはり、老化・劣化および機能低下が、起こることは、否めない。

昔亡くなった父が、『いつまでもあると思うな親と金』と言っていたことを、今、新たな感慨を持って思い出す。限られた残りの寿命の中で、『自分は何をなすべきか、何をやりたいのかを見定めて、今後の生き方を考えたいものである。

人を問わず、動・植物を問わず、生きとし生けるものは、この世に生を受けて、幼年期・青年期を通じて、十分に生命の息吹を謳歌し、生命力の高揚する壮年期を経た後は、いろいろな老化・劣化の影響を受けながら、寿命に達し、やがては土または海に帰ることになる。この寿命たるもの、長短の差があっても、いわば、その生物種生来の生命力に基づくもので、如何なるものも逆らえず、静かに死の訪れを待つことになるのは、いわば、自然の哲理である。されども、頂いた命を大事にして、限られた寿命の中で、大波小波に揺れ揺られながらも、花鳥風月や星・虹などの自然の美景を鑑賞し、動・植物の生命の息吹を感じ、一日一日の生活とまわりの人とのつながりを大切にし、夢と希望を考え、いろいろなことに感受性を持ち、天命および天寿を全うすることが、人間本来の生き方ではないだろうかと考えられる。

追記：

この福島敏夫随筆集「乙戸南雑話」を書き続けて、14年経過した。最初の『花鳥風月および星・虹を愛でながら』という副題に添って、いろいろな話を論じたが、

ここ4年間、「一年を振り返って（その1）では、世界情勢を含めて、喜怒哀楽について、感じたこと・考えたことを書き連ねた。また、「1年を振り返り振り返って

（その2）では、自分の1年の諸活動の要約を続けた。すると、少しずつ、「命と寿命と生き方」について、うっすらと、まとまってきたように思われる。

「言論の自由と情報発信と啓蒙」、「多頭流での研究活動」は、節目と区切りになるようだ。生命力に恵まれて、もう少し続けられれば、『夢と希望』を持って、

自分の生き様を発揮しながら、かなりの程度、世のため、人のためにも貢献できるのではないかと思う次第である。

追記：

令和8年6月5日（81歳現在）

いろいろな大波小波にまみれながらも、いろいろな人に助けられ、また生命力にも恵まれ、80代に突入した。頂きたいのちを大事にして、やれること、やりたい

ことを、できる限り続けるつもりである。未完成になるものも、ある程度、遺稿の形でも残す予定である。

（蜉蝣（かげろう）は命を見つめて今生きる

【輝ける命の息吹花の春：読み人知らず